



# くたばれ、ネオリベリズム

サイモン・スプリンガー  
**Simon Springer**

ビクトリア大学 地理学部  
Department of Geography, University of Victoria  
[simonspringer@gmail.com](mailto:simonspringer@gmail.com)

和訳：渡邊小百合

---

要約：題名通り、くたばれ、ネオリベリズム(Fuck it)。  
ネオリベリズムは最低、最悪。私たちには必要ない。

キーワード：くたばれ、ネオリベリズム; 木っ端みじんに消え失せろ (fuck it to hell)

---

くたばれ、ネオリベリズム(*Fuck Neoliberalism*)。これが、本稿が伝える飾りのない率直な主旨である。この主旨をもって、本議論を終了することもできるだろうし、そうしたとしてもたいした変わりはない。私の所論は明確であり、私がここで何を述べようとしているのか、その要旨はすでに伝わっているであろう。ネオリベリズムに関し、その議論で私が付け加えるべきプラスの局面は何一つないし、それを論議せざるを得ないこと自体に全くもってうんざりしているというのが私の本音だ。もうたくさんだ、その一言につきる。ネオリベリズムを本当に忘れてしまいたいという思いもあり、本稿題名を「Forget Neoliberalism(忘れてしまおう、ネオリベリズム)」にすることも一時は考えた。長年にわたり、私はネオリベリズムをテーマとした論文を執筆してきた(Springer 2008, 2009, 2011, 2013, 2015; Springer et al. 2016)が、ネオリベリズムをテーマとした執筆活動を続けることは、結局のところその存続性を強めてしまっているのではないかという不安から、これを主題とした論議にこれ以上の労力を注ぎたくないとさえ思うようになった。しかし同時に、すでに私たちが共有する世界にこれ程の破壊的、弱体化効果をもたらしてきた現象の存在から目をそむけ、集散的に無視するという政治的戦略には大きな危険が潜んでいることもまた私は認識している。ネオリベリズムには絶え間ない力が注がれていて、それを否定するこ



とは困難であるし、またその存在を無視するといった戦略が取るべき適切なアプローチだという確信は全く持てない(Springer 2016a)。そこで私の脳裏に浮かんできた言葉が、「それなら、そんなものくたばってしまえ(well fuck it then)」そのものであり、本稿の題名としてより落ち着いた、穏やかなものを採用すれば、私が選択したこの題名で人々を不愉快な気持ちにさせてしまうことは避けられるだろうとも思ったが、結局その後考えを変えた。そもそも私達がより心配すべきは不敬な言葉を使うことではなくネオリベラリズムの下劣な言説(ディスコース)そのものではないだろうか。私達を狼狽させるネオリベラリズムに私達は怒ってしかるべきであり、最終的にその境界線を越えることを目指さなければならない。だから私は、境界線を越え、狼狽させ、そして怒りを買うことこそが私が本当にしたいことなのだという結論に至った。題名の響きを柔らかくすること自体、ネオリベラリズムの力にさらに譲歩したことになるのではなかろうか。私は当初、この題名によって私自身の名声に何らかの影響が出るのではないかと心配した。研究者として引き続きさらなる上を目指すなり、新天地への移動を考えたりした時、将来の昇進や採用の邪魔にならないだろうか。この時私は、ネオリベラリズムが支配する世界に対して敗北を認めたように感じた。冗談じゃない(‘Fuck that’)

また私は、ネオリベラリズムの言説に対抗するに十分な口語的応答手段がないことを認めてしまっているようにも感じた。まるでその体系の弱体化を図るには、その雑色や雑種性、突然変異における複雑な地理的理論を用いた学術形式をもって応答するしかないかのようだ。それでは人々は理解できず彼らの無力化を招くように思え、私自身がこうした理論のいくつかを明確化することに寄与してきたわけだが(Springer 2010)、このような理論的枠組みは私が本当に論じたい事柄とは相反する働きをしていると感じることが多々ある。毎日の、通常の、目立たない、平凡な生活においてこそ政治的手段としての拒絶の行使が活かされるのだと私は思う。こうして私は、「Fuck Neoliberalism (くたばれ、ネオリベラリズム)」に落ち着いたわけであるが、それはなぜなら、私が本当に言いたい事のほとんどをその題名は伝えているからである。もちろん私の論点は題名より多少多くの意味合いを含んではいるが、この題名を考える上で、私はおそらく今までの人生の中で一番「fuck」という単語についてより深く考えることとなった。なんとすばらしく多彩な単語なのだろう！名詞だけでなく動詞としても使われ、おそらく形容詞として英語で最も使われる感嘆を表す言葉だろう。怒りや軽蔑、苛立ち、無関心、驚き、焦りを表現するのに使われ、また口をついて出てくる意味のない強調語句としても使われる。例えば次のように様々な意味で使われる。「fuck something up (何かをダメにする)」、「fuck someone over (誰かをだます)」、「fuck around (ふざける、どうでもいいことをして時間を無駄にするなど)」、「not give a fuck (関係ない、どうでもいい)」、「go fuck yourself (ふざけるな、勝手にしろ)」のように相手に対して行け(“go”)と指示できるという点で、この単語がここでは明らかに地理的基準点の意味合いを持っていることが分かる。

この時点で、「そんなこと、どうだっていいだろう (‘who gives a fuck?’)」という読者もいるかもしれない。少なくとも、私にとってはどうでもよいことではない。もしあなたがネオリベラリズムの終焉に興味があるのなら、是非考えてほしい。この単語が持つ大きな力は、ネオリベラリズムへの対抗手段にもなり得るのだ。

この力の可能性を掘り下げて解き放つためには、私達はやはり「fuck neoliberalism (くたばれ、ネオリベラリズム)」の言葉に隠されたニュアンス (意味合い) を理解する必要があるだろう。しかしそうは言いつつも、やはりニュアンスなんてものもクソくらえだ (“fuck nuance”). Kieran Healy (2016: 1)が最近論じたように、ニュアンスというのは「大概、知的観点からは興味深く、経験的に生成する、または実用に優れた理論の発展を妨害する。」ものである。そこで、ニュアンスへの執着をやめ、ネオリベラリズムをぶっ潰す (“fucking neoliberalism”) ために私達が優先すべき事をさっそく考えてみよう。

第一の意味合いは最も明らかであろう。「くたばれ、ネオリベラリズム(fuck neoliberalism)」と叫ぶことで、私達はネオリベラリズムという機械に対する憤怒を表すことができる。それは、私達の怒り、そして憤慨の感情を叫びたい、私達に向かってネオリベラリズムが見せつけてきた有害な悪意に向かって今度は逆に毒を吐き飛ばしてやりたいと切望する私達の思いの現れである。この思いを伝えるためには、さらに多くのネオリベラリズムに対する抗議集会を發動するか、またはその影響についてもっと論文や書籍を書いて批判するという方法がある。2番目の方法は、ネオリベラリズム反対の立場にすでに転換している人々に向けた説論であり、最初の方法では、邪道に陥った人々が自ら選んで方向転換することに望みをかけて実行される。これらが抵抗運動において大切な方法であることを否定するわけではないが、ネオリベラリズム優勢の現状をひっくり返し、私達に有利な状況を作り出すためにはそれら方法は十分ではないと実際のところ言わざるを得ない。反対姿勢を大々的に公に示そうとして、私達は有力者と話し合いの場を持つことを試みるが、その際、彼らが大多数の人民による反対意見に耳を傾け、便宜をはかってくれるのだという誤った思い込みをしてしまうのである (Graeber 2009)。それより、話し合いをすること自体、もうやめるべきではないだろうか。これこそが「くたばれ、ネオリベラリズム(fuck neoliberalism)」に込められている第二の意味合いであり、これは拒絶の概念として見られるものである。これは、その一切の言及をやめるという、J.K.Gibson-Graham(1996)が唱導した方法により、私達が知るところの) ネオリベラリズムの終焉を唱えることである。特に学者の場合で言うと、研究テーマとしてネオリベラリズムを重点的に論じることに終止符を打つことである。それは、ネオリベラリズムを完全に消し去ったり無視したりという、すでに私自身がそうすることの問題性を認識しているやり方ではなく、別のテーマに焦点をあてた執筆に取りかかることであろう。これもまた、ネオリベラリズムの世界観を超えて活動しようとする時、私達にとって非常に重要な接点である。しかし、私はこれで十分だとこの時点においても心から確信を持つことができない。 Mark Purcell (2016: 620)が述べているように、「私達は、ネオリベラリズムから離れ、私達自身に目を向けて、困難ではあるが喜ばしくもある、自分たちの事は自分たちで管理するための取組みを始める必要がある。」否定や抗議、批判は必要であるものの、ネオリベラリズムを積極的にぶち壊そうとする時、その影響力が及ばない所で活動することでその目的を達成することも考える必要がある。

ネオリベラリズムの領域を超えた直接行動は、予示的政治 (Maeckelbergh 2011) とは何かを物語っており、「くたばれ、ネオリベラリズム(fuck neoliberalism)」に込められた思いをかきたてようとする時、私達がまず着目すべき第三

の意味合いであり、また最も重要な意味合いである。予示することは、目指す将来の社会像を反映しようとする水平関係構造や組織形態を具現化することを強調し、それにより代表政治に見られる中央集権的傾向、階層制度および権力を拒絶することである (Bo

ggs 1977)。「話し合いはもうしない」の領域を超え、予示的行動、直接行動は、私達が何を欲しようと、その全ては私達自身で実現可能であることを認識しつつ、始めから話し合うことなど何もなかったことを主張するのである。それにも関わらず、あらゆる政治的言説や要請を掌握、専有するネオリベラリズムのやり方にあまりにも大きな関心が向けられてきた (Barnett 2005; Lewis 2009; Ong 2007)。David Harvey (2015)のような批評家によると、あとほんの少しの国家権力(影響)があればネオリベラリズムが抱える問題は解決し得るのであり、その考えから、Harveyは非階層的組織や水平政治は、すでに約束されているネオリベラリズム未来を助ける潤滑油に過ぎないとしてそれらを即、否定する。しかしそうした悲観的見方の中で、彼は予示的政治というものが目的を達成するための手段ではなく、未来の手段であるという点を完全に誤解してしまっている。つまり、予示的政治には、常時的、継続的な監視態勢が組み込まれているため、予示的行動の実践を権力の中に組み込むことはできないのである。それが反射的であれ慎重であれ、常にその視点は、コミュニティーの意思を実現するものとしての生産、発明そして創造に向けられている。このように、予示的政治は明らかに反ネオリベラリズムの立場を取る。それは私達の手段、それ自体が目的である手段として、手段全てを結束させる。予示的行動の実施は、人々が、実現し得ない空約束であるユートピア (ラテン語で「存在しない場所」 *'no place'*) への到達を目指す政治運動の先駆者や無産階級としてではなく、「古い殻の中で (in the shell of the old)」新しい世界を今、ここで創り出し、永続的勤労と新世界が何を必要としているかの再確認を行うことをその内在性として基盤に置き、急進的平等関係にある者として、共存することで生まれる悦楽と歓喜の情を抱くことである (Ince 2012)。

ネオリベラリズムには、私達が尊敬するに価する側面は何一つないのであり、予示的政治の創造的観点に同調する私のメッセージは、端的に、「(ネオリベラリズムよ、) くたばれ ('fuck it')」なのである。私達の政治的想像を阻むその束縛なんか、くたばれ。それによって生み出だされる暴力も、くたばれ。まるで美德であるかのごとくそれが称揚する不平等もくたばってしまえ。自然に対して猛威をふるってきたその破壊行為よ、くたばれ。終わりなき利殖サイクルと成長信奉よ、くたばれ。それを支持、推進し続けるモンペルラン・ソサイエティーも全てのシンクタンク (頭脳集団) も、くたばれ。自分たちの考えを私達に押し付けたフリードリヒ・ハイエクもミルトン・フリードマンも、くたばれ。サッチャー主義者、レーガン主義者そして欲に目がくらんでいる卑怯で自己愛の強い政治家も、くたばれ。私達のトイレ清掃か床拭きをする者としての価値はあるが、私達のコミュニティーの一員としての価値はないと「他者」を見る、恐怖を利用した排斥もくたばってしまえ。勢いを増すばかりの数値指標への傾倒、そして大切な物全てが計量できるわけではないことの見過ごしも、くたばれ。コミュニティーの要求を犠牲にした利益の追求も、くたばれ。ネオリベラリズムに象徴される全てのもの、そして自ら忍び乗り込んだトロイの木馬もくたばってしまえ！私達は、ずいぶんと長い間、「代替案などない」、「上げ潮は船をみな持ち上げる」のだと、そしてみなが権勢し合う「適者生存

(‘survival of the fittest’) というダーウィン説の悪夢のような社会に生きているのだと言い聞かされてきた。私達は「コモンズの悲劇」論をすっかり鵜呑みにしてしまったのであるが、実はこれは、「資本主義の悲劇」とその終わりなき略奪戦争を反映する策略だったのである(Le Billon 2012)。Garrett Hardin (1968)の唯一の弱点は、彼が、放牧されている牛がどのようにしてすでに所有物であったかを全く考えなかったことである。私的所有という前提条件がない共有地(コモンズ)としての事実上のコモンズを私達が呼び戻したらどうなるだろうか(Jeppesen et al. 2014)。私達が、すでに始まっている代替案の予示的行動をより注意深く見守り、こうした経験を最も重要な組織の形態であるとして優先したとしたら、どうなるだろうか(White and Williams 2012)。競争と手柄という苦渋をなめるのではなく、ネオリベリズムが出す処方箋を己に投与するかわりに、協力と相互扶助からくるより深く作用する療養にエネルギーを注いだら、どうなるだろうか(Hedkert 2010)。

Jamie Peck (2004: 403)はかつて、ネオリベリズムを「急進的政治的スローガン(‘radical political slogan’)」と呼んだが、批評という枠組みの中に留まっているだけではもはや不十分なのだ。敵を特定してからすでに何年も過ぎ去ったが、それ以来、私達はネオリベリズムについて執筆や抗議集会を通してそれについてよく知ることとなった。しかし、2008年の金融危機の爪痕や直後のウォール街占拠運動(Occupy Movement)に示されるように、私達はその敗北を確信しながらも、ネオリベリズムはわずかな酸素を求め喘ぎ、より強力になったゾンビのように自らを蘇生し続けているのである(Crouch 2011; Peck 2010)。Japhy Wilson (2016)はこのネオリベリズムの前進力を、「ネオリベラル・ゴシック(‘neoliberal gothic’)」と呼ぶが、このホラーショーに打ち勝つためには、私達の政治を自律の枠組みに移行させる必要があると私は考える(Rollo 2016)。「くたばれ、ネオリベラル(fuck neoliberalism)」が新しい形の政治を求めるマントラになったらどうだろうか。この句が言及しているのは、行動することのみならず、私達が積極的に己の生を全うすることができる空間(spaces)と瞬間(moments)に生きることへの主張であり、この句はその肯定を叫ぶのである。この句を使う度に、それが単なる言葉としての領域を超えて、理論と実践を合わせて予示的行動を美しく体現化させる自律型活動体の要求であると認識したらどうだろうか。ネオリベリズムを拒絶しようとする時、私達は多面的アプローチを取らなければならない。ネオリベリズムを完全に無視、忘れることはできない一方で、私達は、修辞に求める成果や、成果を約束する修辞を超越した方法で反対活動を行うことができる。いずれにしても、ここで新しい急進的政治スローガンを掲げよう。ハッシュタグ(#fuckneoliberalism)を使って私達のネオリベリズム蔑視の気持ちをネットで広めよう！だが、私達の憤りを表すためにはもっと何かしなくてはならない。私達の決意を行動に移し、私達の願望を今(‘now’)、ここ(‘here’)で内在的に具現化し、それを体験することによって実現しなければならない(Springer 2016a)。私達は、自らこの世界を創造し直す必要があるのであり、その過程は将来に先延ばしすることはできないのである。

私達は、既存の代表政治体制に訴え続けることで自らを故意に欺き、弱体化させてきた。そこに盲目的に信頼を置いてきた私達は、空から救済の手が下りてくるのを永遠に待つこととなったのである。その制度は隅から隅まで退廃しきっていることを自ら露呈し、事ある度に、私達が選んだ偉大なる次期候補者も結局は無能であったという結果に終わる。このネオリベリズム時代、問題ある個人が権力の座についているだけなどという程度の話では終わらない。本当に問題なのは、私達はその体制そのものを信じているという点である。それにより、私達自身が「ルシファー効果(‘the Lucifer Effect’)」を顕在化させる組織的条件を生み出してしまうのだ(Zimbardo 2007)。「悪の陳腐さ (‘The banality of evil’)」には、ルールを無視した力の逸脱を称賛する体制下で政治家はただその職務を遂行しているに過ぎないが、それはなぜならそうした体制はそもそも資本主義の法則に則るよう作られているという事実がある(Arendt 1971)。しかし私達がそれに追従する必要はない。この法則から私達が受ける恩義もない。私達の直接行動と代替案の結集によって、私達はその全構造を告発し、その乱用の悪循環を打ち破ることができる。政治体制が資本主義により定義され、その目的のために条件付けられ、その中に編み込まれ、そしてそこから派生する時、その体制は、世界における私達の知識獲得と生の手段を反映する存在とは決してなり得ないのであり、そうであるなら、私達はこうした生き方の行方を自らの手中に収め、私達の集団的活動体を取り戻す必要がある。政治において私達は自律しなければならないし、一個人の征服、苦しみは全民に対する抑圧であると認識する、より相関的な団結感を受け入れなければならない(Shannon and Rouge 2009; Springer 2014)。私達は、相互扶助、仲間意識、相互依存や、民衆に力を(‘power to the people’)が本来意味するところの民主主義を再編成する非階層的な組織形態に新たに身を投じ、別様の実現可能な世界に生きることが可能となる。結局のところ、ネオリベリズムは、特に腐敗した理論であり、多くの俗悪な結果や野暮な仮定を生み出す。それに応えて、ネオリベリズムは、同じくらい侮辱的な言葉と行動をもって扱われるに値する。私達の共同体、協力、そして互いへの思いやりの気持ちは全てネオリベリズムが厭うものである。私達が歓喜に沸くことを嫌うのである。私達が「くたばれ、ネオリベリズム(‘fuck neoliberalism’)」と言うとき、それがただの言葉に終わらないことを、そしてそれが私達互いへの約束の成立であることを示そう。大きな声でそう叫ぼう、私と共に叫ぼう。そして耳を傾ける人全てに向かって叫ぼう。そして何より、この言葉を叫ぶとき、それは行動しようとの明快な呼びかけであり、このふざけた世界を変えるための私達の予示的行動力の体現であることを示そうではないか。くたばれ、ネオリベリズム！

謝辞本稿題名は、Jack

Tsonisによるところが大きい。彼が自己紹介の目的で私に宛てた2015年の電子メールには、本題名となる言葉が件名に書かれており、その内容はすばらしいものであった。メッセージは率直で的を得ていた。彼はその中で、学期毎の契約更新に左右されざるを得ない、ウェスタンシドニー大学における自身の危うい立場について語っている。まさに、くたばれ、ネオリベリズム、である。その後、より安定した職に就いたと彼から連絡があったが、ネオリベリズムを身近に感じたことで、彼は以前にもましてそれに対して嫌悪感と拒絶感を覚えたのだという。インスピレーションをありがとう！また、私

の考えに耳を傾け、共に笑ってくれたKean BirchとToby Rolloにも感謝している。Mark Purcellについては、ネオリベリズムを超えた彼の素晴らしい歓喜を誘う思考に私は多に影響を受けることとなった。遊び心溢れる精神と支援をもって、私が本稿で論議している予示的行動とは何なのか、その真の姿を見せてくれたLevi Gahmanにも感謝の意を表したい (“Listen Neoliberalism!” A Personal Response to Simon Springer’s “Fuck Neoliberalism”)。Farhang RouhaniおよびRhon Teruelleによる査読は、大多数による意見の合致を示すものであり、学会においてもまだ抵抗力は存在しているのだと私が信じるきっかけを与えてくれた。最後に、本稿をネットに初めて投稿した後、私への手紙に各自が思うこと、そして何より同調の意を表明して下さった数多くの人々に感謝の意を述べたい。本当にたくさんの方が同じ思いを抱いていることを、慎ましく受け止めると共に私は希望に満ちた思いでいる。みなで勝利を手にしよう！

### 参考文献

- Boggs, C. (1977). Marxism, prefigurative communism, and the problem of workers’ control. *Radical America*, 11(6), 99-122.
- Crouch, C. (2011). *The Strange Non-Death of Neoliberalism*. Malden, MA: Polity Press
- Gibson-Graham, J. K. (1996). *The End of Capitalism (as We Knew It): A Feminist Critique of Political Economy*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Graeber, D. (2009). *Direct Action: An Ethnography*. Oakland: AK Press.
- Hardin, G. (1968). The tragedy of the commons. *Science*, 162(3859), 1243-1248.
- Harvey, D. (2015). “Listen, Anarchist!” A personal response to Simon Springer’s “Why a radical geography must be anarchist”. *DavidHarvey.org*. <http://davidharvey.org/2015/06/listen-anarchist-by-david-harvey/>
- Healy, K. (2016) Fuck nuance. *Sociological Theory*. <https://kieranhealy.org/files/papers/fuck-nuance.pdf>
- Heckert, J. (2010). Listening, caring, becoming: anarchism as an ethics of direct relationships. In Franks, B. (ed.). *Anarchism and Moral Philosophy*. New York: Palgrave Macmillan, pp. 186-207.
- Ince, A. (2012). In the shell of the old: Anarchist geographies of territorialisation. *Antipode*, 44(5), 1645-1666.
- Jeppesen, S., Kruzynski, A., Sarrasin, R., & Breton, É. (2014). The anarchist commons. *Ephemera*, 14(4), 879-900.
- Le Billon, P. (2012). *Wars of Plunder: Conflicts, Profits and the Politics of Resources*. New York: Columbia University Press.
- Lewis, N. (2009). Progressive spaces of neoliberalism?. *Asia Pacific Viewpoint*, 50(2), 113-119.
- Maeckelbergh, M. (2011). Doing is believing: Prefiguration as strategic practice in the alterglobalization movement. *Social Movement Studies*, 10(1), 1-20.
- Ong, A. (2007). Neoliberalism as a mobile technology. *Transactions of the Institute of British Geographers*, 32(1), 3-8.

- Peck, J. (2004). Geography and public policy: constructions of neoliberalism. *Progress in Human Geography*, 28(3), 392-405.
- Peck, J. (2010). Zombie neoliberalism and the ambidextrous state. *Theoretical Criminology*, 14(1), 104-110.
- Purcell, M. (2016). Our new arms. In Springer, S., Birch, K. and MacLeavy, J. (eds.). *The Handbook of Neoliberalism*. New York: Routledge, pp. 613-622.
- Rollo, T. (2016). Democracy, agency and radical children's geographies. In White, R. J., Springer, S. and Souza, M. L. de. (eds.). *The Practice of Freedom: Anarchism, Geography and the Spirit of Revolt*. Lanham, MD: Rowman & Littlefield.
- Shannon, D. and Rouge, J. (2009) Refusing to wait: anarchism and intersectionality. *Anarkismo*. <http://anarkismo.net/article/14923>
- Springer, S. (2008). The nonillusory effects of neoliberalisation: Linking geographies of poverty, inequality, and violence. *Geoforum*, 39(4), 1520-1525.
- Springer, S. (2009). Renewed authoritarianism in Southeast Asia: undermining democracy through neoliberal reform. *Asia Pacific Viewpoint*, 50(3), 271-276.
- Springer, S. (2010). Neoliberalism and geography: Expansions, variegations, formations. *Geography Compass*, 4(8), 1025-1038.
- Springer, S. (2011). Articulated neoliberalism: the specificity of patronage, kleptocracy, and violence in Cambodia's neoliberalization. *Environment and Planning A*, 43(11), 2554-2570.
- Springer, S. (2012). Anarchism! What geography still ought to be. *Antipode*, 44(5), 1605-1624.
- Springer, S. (2013). Neoliberalism. *The Ashgate Research Companion to Critical Geopolitics*. Eds. K. Dodds, M. Kuus, and J. Sharp. Burlington, VT: Ashgate, pp. 147-164.
- Springer, S. (2014). War and pieces. *Space and Polity*, 18(1), 85-96.
- Springer, S. (2015). *Violent Neoliberalism: Development, Discourse and Dispossession in Cambodia*. New York: Palgrave MacMillan.
- Springer, S. (2016 a) *The Anarchist Roots of Geography: Toward Spatial Emancipation*. Minneapolis, MN: University of Minnesota Press.
- Springer, S. (2016 b) *The Discourse of Neoliberalism: An Anatomy of a Powerful Idea*. Lanham, MD: Rowman & Littlefield.
- Springer, S., Birch, K. and MacLeavy, J. (2016) An introduction to neoliberalism. In Springer, S., Birch, K. and MacLeavy, J. (eds.). *The Handbook of Neoliberalism*. New York: Routledge, pp. 1-14.
- White, R. J., and Williams, C. C. (2012). The pervasive nature of heterodox economic spaces at a time of neoliberal crisis: towards a "postneoliberal" anarchist future. *Antipode*, 44(5), 1625-1644.
- Wilson, J. (2016). Neoliberal gothic. In Springer, S., Birch, K. and MacLeavy, J. (eds.). *The Handbook of Neoliberalism*. New York: Routledge, pp. 592-602.
- Zimbardo, P. (2007). *The Lucifer Effect: Understanding How Good People Turn Evil*. New York: Random House.